

とっとり Now

鳥取県総合情報誌 vol.117

2018
Spring

「巻頭特集」

生涯、「手仕事」 貫いた奇才

イラストレーター 毛利彰の世界

「特集」

とらえ、感じ、動く。

「観る」「踊る」2つの舞踊公演



▶コマドリ◀

全長約14cm。雄は頭部から上胸にかけてオレンジ色、腹は灰色、尾羽は茶褐色。雌は雄より全体的に淡い色。「ヒン、カラカラカララ…」という力強いさえずりが、馬のいななきに似ていることから「駒鳥」の名前がついた。低地や暗がりを好み、跳ね歩いて昆虫などを捕食する。夏鳥だが、県内では4月中下旬によく確認されている。

参考文献*「とっりの野鳥」(2003年5月、鳥取県発行)
写真提供*NPO法人日本野鳥の会鳥取県支部 増馬 健一

とっとり Now

鳥取県総合情報誌 vol.117
2018 Spring



『郭公とセロ弾き』(40.9×31.8cm、2015年)



文／角秋勝治 写真／田中良子

あーとの森

フレスコ画 有田 巧

巻頭
特集

生涯、手仕事に貫いた奇才
イラストレーター 毛利彰の世界

4

生きものサンサークロウ
K原やんちの里Eidley

早春の味やブカンゾウ

18

人間の心
Human Life

東條 真千子 スープ研究家

19

きらり匠人
継承の技が語る世界

太鼓職人 大柄 重人

22

特集

とらえ、感じ、動く。
「観る」「踊る」2つの舞踊公演

24

Viva! JUNE LIFE
輝くJUNターナーたち

銀アクセサリー作家 (伯耆町)

30

鳥取のうま味

無添加の本格派フレンチ

32

文字の迷宮をゆく「つれづれ書林女子」
Voice 「おじいちゃんの封筒」紙の仕事

33

読者プレゼント・編集後記

34

*カメラアイは休みます。

●表紙イラスト●



ASAKURA KOUHEI (朝倉 弘平)

絵かき。1983年宮城県仙台市生まれ。自然との交感をテーマにした水彩画を描く。東京の小学校に縦4m、横35mの壁画を描いた。コンセプトは児童たちの発案。約400人が参加し、共に筆を入れたことで、気持ちがひとつになり、心温まる作品が生まれた。



『森へ帰ろう』(181.8×227.2cm、2015年)

ありた・たくみ

1952年、鳥取市生まれ。東京芸術大学大学院修了。88年イタリアに留学。修復家ジュリアーノ・バルディの工房で絵画修復と古典技法を学び、フレスコ画家となる。白日会展で佳作賞、奨励賞、文部大臣奨励賞、内閣総理大臣賞を受賞。現在、白日会常任委員、崇城大学芸術学部教授。

ピュアな魂の記録

フレスコ画 有田 巧

森を巡り水に潜り、太陽にまみれた幼少の記憶は、誰にもあるだろう。だが成長につれて過去は遠のき、純粹性を放棄してしまうのも事実である。有田巧さんが描くフレスコ画(※1)の連作『少年記』は、子どもであったことを忘れた大人への贈り物といえよう。

作品は故郷の記憶に、幻想的な創造を加味した。登場する少年を作者は、「小学生から思春期一步手前の中学1年」に限り、「ストレートな眩しい生命力」を表した。精神分析学者フロイトも「芸術創造とは、幼時体験を追体験しているようなもの」と述べている。

連作の一つ『森へ帰ろう』は、白馬で戯れる悪戯っ子のピノキオや旅芸人の少年たちと、背後にたむろするトナカイに林が連動して、清々しい自然回帰の情景をうたう。景観を平気で破壊する現代人にとって、自然との交歓はやはり限られた年齢になるのか。

『郭公とセロ弾き』は、宮沢賢治(※2)の『セロ弾きのゴーシュ』を題材にしたもの。いまだ謎に満ちた多面体の表現者である賢治は、有田さんが次に手がける深遠なテーマである。「少年」と「賢治」に共通するのは、失われた至純の心。ピュアな魂の探索は、まだまだ続く。

※1 フレスコ画＝13世紀中頃イタリアで確立した壁画の描法。砂と消石灰を混ぜて作った漆喰を壁に塗り、壁が乾かないうちに水で溶いた顔料で描く。

※2 宮沢賢治＝1896-1933。岩手県生まれの詩人・童話作家。信仰と農業に根差した創作で絵も描きセロ(チェロ)も弾く多彩な表現者。



生涯、手仕事、 貫いた奇才

イラストレーター 毛利彰の世界

照れ隠し用に常にサングラスがトレードマークだった毛利さん



『見知らぬ顔』アン・ペリー著(創元推理文庫)の
ブックカバー原画 1995年

重厚な油彩から、モダンなファッション画、幻想的な挿絵…。

力強さと繊細さ、奥深さが同居する独特の表現で、

見るものを惹き付けてやまない。

戦後の高度経済成長期から幅広く活躍した

イラストレーター・毛利彰さん。

没後10年となる2018年、仕事ぶりを振り返り、

異彩を放つその作品の魅力を探る。

文／島 香子 写真／田中 良子(作品以外)

協力／鳥取県立博物館



オリジナル「ヌード」(1986年)



『少年とひまわり』 1953年（鳥取西高等学校蔵）



『K子の像』(仮題) 1953年

毛利さんは1935年、8人兄弟の次男として鳥取市に生まれた。祖父の毛利松南、父の秋晃ともに日本画家だ。特に父は中島菜刀、八百谷冷泉と並び美術界の〳鳥取の三羽鳥〵と称された1人。そんな家系に育った毛利さんが、画家を志すのは自然な流れと思えるが、運命はそれを簡単に許さなかった。

毛利家は鳥取市内に約30軒の借家を持つ資産家だった。しかし、毛利さんが8歳の時、鳥取大地震が発生し借家が被害に。その後も中学生の時に父が死去、鳥取大火での借家全焼と、不運な出来事が相次ぎ、裕福な毛利家は没落の途へ。苦しい生活を強いられる。

それでも洋画に惹かれていた毛利さんは、アルバイトで油絵具などの画材を買い足しながら、14歳の時に『第1回鳥取県美術工芸展』に最年少入選を果たす。厳しい現実に飲み込まれそうな状況下でありながらも、その才能はすでに発掘されていたのである。

一家の担い手として家族の生活を支えながら、進学した鳥取西高では、美術部長を務めた。17歳で描いた『少年とひまわり』が、鳥取市で開かれた東部高校美術展に出展される。

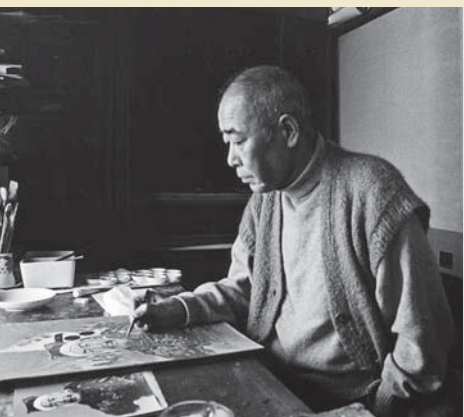
実はこの作品、滞納していた授業料代わりとして生まれた1枚だ。家の経済状態から、高校に通うことがままならない毛利さんを支えたのは、その絵筆に将来性を見出した2人の美術顧問の存在。洋画家の教諭・前田利三さんと、毛利さんの作品を公募展「二水会展」に出品し、美術の世界に羽ばたくきっかけを作った教諭・松田晃八さんだ。松田さんは、挫折しかけていた毛利さんに、「授業料の代わりに、1枚絵を描いて持ってこい」とだけ言った先生。その言葉に喜び、無心にキャンバスと対峙した当時の毛利青年の姿が目には浮かぶようだ。



『弟と石膏像』(仮題) 1953年



『花』1959年



毛利彰年譜

1935年(0歳)

1月9日、鳥取市本町に生まれる。

1943年(8歳)

9月10日、鳥取大地震で貸家が被害に遭う。

1949年(14歳)

3月、父・秋晃が51歳で逝去。
苦しい生活を強いられる。

1952年(17歳)

4月17日、鳥取大火で貸家がすべて焼失。

1953年(18歳)

9月、一水会展に応募した人物画が初入選
(以後5年連続入選)。

1954年(19歳)

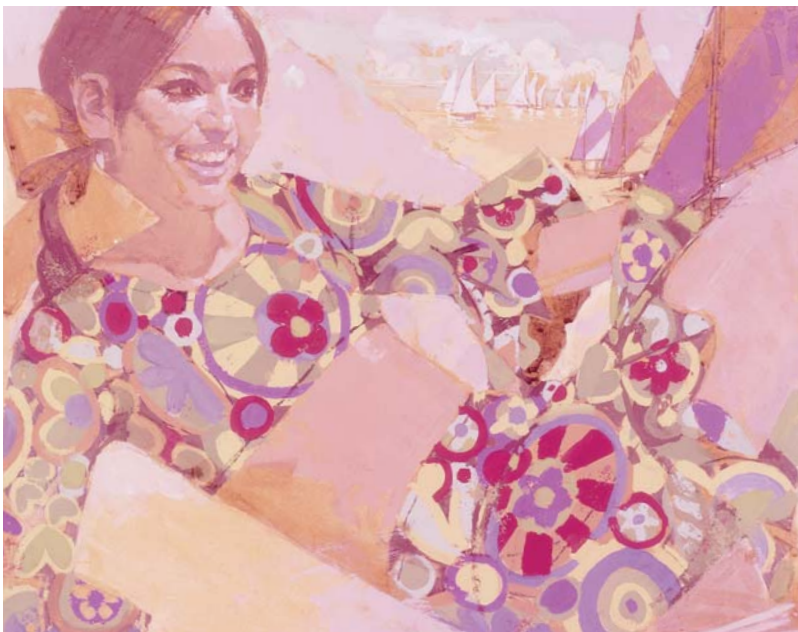
3月、鳥取県立鳥取西高等学校卒業。東京芸術大学進学を目指し、上京して阿佐ヶ谷美術研究所に入る。

1955年(20歳)

経済的事情により帰郷。
鳥取大丸宣伝部に勤務。



『赤い建物』1956年



伊勢丹のポスター原画

伊勢丹の新聞広告原画
1969年11月1970年

伊勢丹のポスター原画 1967年

このような恩師の支えもあり、1年の休学を余儀なくされるも、19歳で高校を卒業。一度は、東京芸術大学を目指すために上京し、「阿佐ヶ谷美術研究所」に入所。しかし、絵の道で家族の生活を支えられる保証はどこにも無い。20歳で帰郷、鳥取大丸宣伝部（鳥取市）に勤務するが、それでも夢は諦めきれなかった。

運命の転機は、22歳の時。鳥取大丸勤務の際に知り合い、後に妻となる恩田雅子さんの後押しもあって、「画家を志すならやはり東京だ」と考え、都内の小さなデザイン会社への就職内定を取り付けた。その日、帰りの汽車の待ち時間に、たまたま知人を訪ねてふらっと百貨店の伊勢丹に立ち寄った。

そこで「伊勢丹がイラストレーターを探している。ちょうど、毛利を話題にしていたところだぞ」と聞かされる。担当者に会うと「今ここで描いてみる」と言われ、描いたが自身で納得がいかず、帰郷してから徹夜で20枚のデザイン画を描きあげて、翌日郵送。そして、伊勢丹宣伝部員採用という幸運を掴んだのだ。

東京オリンピック以降、本格的に高度経済成長

を迎えた日本の消費文化は、華やかな百貨店業界がリード。流行の震源地は、一流百貨店が打ち出す広告宣伝といっても過言ではなかった。伊勢丹は、新しさに敏感な「ヤングマーケット」に照準を合わせ、名を広くアピールするために練られたメインの戦略手法は、写真表現ではなく手描きのイラストレーション。そこに、毛利青年のイラストがピタリとはまったのである。

あまた発行される新聞や電車の広告の中で、毛利さんが手がけるイラストは異彩を放った。人物の表情やポーズ、身に付けるファッションなどを、グラフィックデザインと調和させ、独特の精密なタッチと共に宣伝広告として昇華させたそれは、たちまち伊勢丹のメインキャラクターとして認知された。ポスターが盗まれるほどに人気が上がり、毛利さんの元にファンレターが届くようにまでなる。

毛利彰年譜

1957年(22歳)

鳥取大丸を辞め再び上京。一旦、東京のデザイン会社に内定するが、帰路、知人を訪ねて伊勢丹に立ち寄ったことが縁で伊勢丹宣伝部への入社が決まる。11月、恩田雅子と結婚。

1959年(24歳)

伊勢丹の宣伝広告制作を手掛けている「スタジオ・ユニ」に入社。

1971年(36歳)

「スタジオ・ユニ」を退社、フリーランスとなる。

1972年(37歳)

「毛利彰イラストレーション原画展」を東京で開催。

1975年(40歳)

9月、鳥取県立博物館で「毛利彰イラストレーション原画展」を開催。

1979年(44歳)

1月25日～、曾野綾子の新聞小説『神の汚れた手』（朝日新聞）の連載開始、挿絵を担当（同年12月31日まで）。

1980年(45歳)

2月28日～3月4日、鳥取大丸で「毛利彰（挿絵）原画展」開催。新聞連載小説・曾野綾子『神の汚れた手』の挿絵を展示。

1987年(52歳)

創刊された学研の『歴史群像シリーズ』の表紙を担当。

1990年(55歳)

5月11日、曾野綾子の新聞挿絵などで、第21回平成2年度講談社出版文化賞さしえ賞を受賞。

1991年(56歳)

2月28日、作品集『毛利彰 イラストレーション』（徳間書店）を発行。

1993年(58歳)

1月1日から曾野綾子の新聞小説『夢に殉ず』（朝日新聞）の連載開始、挿絵を担当（同年12月31日まで）。

1999年(64歳)

4月から吉井恵璃子の新聞小説『すずかけ物語』（全国農業新聞）の挿絵を担当（2000年3月まで）。

2003年(68歳)

曾野綾子の新聞小説『哀歌』（毎日新聞）の連載開始、挿絵を担当（2004年11月25日まで）。

2004年(69歳)

入退院を繰り返す中、曾野綾子の新聞小説『哀歌』の挿絵を担当。

2007年(72歳)

3月、療養に専念するため、鳥取の病院に転院。

2008年(73歳)

4月9日、呼吸不全のため逝去。



伊勢丹のポスター原画 1968年



モデルやスタジオ・ユニのメンバーと。前列中央が小谷さん、右が毛利さん 1967年
(写真提供：小谷育弘)



「写真には映らない部分をより繊細にリアルに描いたデッサン力は秀逸」と毛利さんを絶賛する小谷さん

入社直後は、「画家になるためのプロセス」と軽い気持ちで取り組んでいたが、自分の描いた絵への反響が予想以上に大きく、世の中に受け入れられていることを実感し始めた毛利さん。同時にその責任の重さも痛感し、覚悟を決めて仕事に臨むようになる。

入社から2年後には、1959年に設立された「日本デザインセンター」に伊勢丹のデザイナーの多くが移籍したが、毛利さんは伊勢丹を離れなかった。同年、伊勢丹の宣伝広告を専門に手がける「スタジオ・ユニ」にそのまま入社。毛利さんの2年後輩で、制作ディレクターとして入社した小谷育弘さん（現：武蔵野美術大学名誉教授）は、「実直で正義感が強かった」と、毛利さんの人柄を語る。

「角刈りで一見強面。だけどとても穏やかで、仕事が終わると、居酒屋などで一緒に楽しく酒を飲みました」。

一方、強烈な印象を抱いたのは、日々消費される1枚のイラストに賭ける毛利さんの熱意と探求心だ。「毛利さんにとって、ファッションは全く未知の分野。それでも『物まねはしたくない』と、当時高価だった外国のファッション雑誌をいくつも取り寄せ、人一倍、努力を重ねていました」。



のんびりとした口調で、にこやかに当時を振り返る妻の雅子さん

女性のブラウス1枚にしても、実際のモデルに着せて写真撮りしたものを資料に描く。身に着けた時、どんな風にシワがよるのか、模様がどう変化するのかといったことまで追求していたという。

伊勢丹入社後、雅子さんと結婚し、一男一女をもうけた毛利さんは、東京都内の畑に囲まれた一軒家で暮らす。「毛利彰」の名前が世間に知れるようになってからも、質素な生活は変わらなかった。

「いつも優しく、声を荒げるとしたら、お酒を飲みすぎないよう私が注意する時ぐらいだったかな」と、にこやかに振り返る雅子さん。「仕事の話はあまり話さなかったので知りませんねえ」とも。雅子さんの話から、自身の苦悩は語ることなく、家族を大事にした良き家庭人の姿が浮かぶ。

熱意と探求心で人一倍の努力



伊勢丹のポスター原画 1970年



伊勢丹のポスター原画 1970年頃



伊勢丹のポスター原画 1968年



伊勢丹のポスター原画 1970年



伊勢丹のポスター原画 1969年



伊勢丹の広告原画 1967-1968年頃

当時、圧倒的な発行部数を誇った新聞広告を中心に、鉛筆を駆使したイラストで、徹底した写真表現にこだわった毛利さん。H・F・Bと硬さの度合いが違う鉛筆を使い分けて原画を描き、印刷された時のコントラストを出すため、自分で製版所に通って線や色の濃淡のデータを取るなど、写真では表現しきれない奥行きやリアリティー、より強いインパクトを追い求め続けた。

こうした毛利さんの努力もあって、「スタジオ・ユニ」が制作した伊勢丹の広告は、名だたる広告賞を多数受賞。しかし、60年代も後半になると、時代の広告表現の流れは、イラストから写真や映像のリアリティーへと加速する。

1971年、36歳になった毛利さんは「潮時かな」と感じ、足かけ14年におよぶ伊勢丹の広告から離れ、フリーランスのイラストレーターに。その後は企業広告、新聞小説の挿絵、書籍の装丁など、幅広い分野でイラストを手がけると同時に、作品展を開いてオリジナル作品も発表するようになった。

本来の才能をのびのび発揮



ミスタードーナツのパッケージ・ポスター原画 1984年



シネマ『サン・スーシの女』のポスター原画 1984年



LOOKのポスター原画 1978年



『歴史群像No.12』(学研)のマガジカバー原画 1994年



思い出を振り返りながら談笑する家族(左からみきさん、雅子さん、葉さん)



離れていても 会話はたくさん

▼家族のエピソード▼



『ひまわり先生』毛利みき

毛利さんが亡くなった際、その反響の大きさは戸惑うほどだったと振り返る長男の葉さん。それほど、家で子どもたちと接する時は、仕事に向けるストイックな姿勢とかけ離れた、朗らかで愉快的父だった。

幼い頃は、東京都内とはいえ自然が残る自宅近くで、虫捕りに連れて行ってもらったことを覚えている。「私は小学5年生以降、父と離れて暮らしましたが、寂しさより年に数回会う楽しみのほうが大きかった。毎日のように電話もくれていましたしね」。

大人になってから東京の家を訪ねると、手料理で迎えてくれ、前のめりになって話を聞いてくれたという。「私は絵よりも、政治、歴史、科学などに関心が高かったのですが、父は苦手分野だったようで」と、葉さんは苦笑する。

「父は、いつも兄の上京を楽しみにしていて、『今度、葉くんが来たら何の話をしてもらうかな?』と嬉しそうでしたよ」。そう証言するのは、長女のみきさん。みきさんは予備校時代の半年ほど、父と同居していた。

「子どもの頃、父に怒られた記憶はたったの1度きりですが、晩酌の時間に遅れるなど自分のペースを乱されると不機嫌になったり、知人に私を会わせたがったり、娘としては閉口することもありましたけど(笑)」。

しかし、デザイナーを経てイラストレーターとして独立したみきさんに対し、同業者の父の助言は端的なひとことだった。「人物の耳と手はごまかさないで、きちんと描いた方がいいよ」。

何だか、とても毛利さんらしい。

磨き続けた表現力が開花



『公爵夫人ターニャの指輪』エミリア&エドワード・トーボリ著(新潮文庫)のブックカバー原画 1993年



オリジナル『コスモスと野仏』2004年



オリジナル 1989年



オリジナル『吉川経家』1992年(鳥取市歴史博物館蔵)

この頃から晩年までの作品は、伊勢丹時代の印象と異なり、ドラマチックな描写が光る。そんな毛利さんを小谷さんは「根本的には変わらない」と評する。

「とにかく締め切り期限まで、精一杯格闘する人。ただ単に依頼されたテーマを描くのではなく、人物でも背景に内在する『何か』、その奥に隠されている『何か』を描きたいと思い続けていたのでは。洋画に目覚めた青年時代から、見せ方は同じ。伊勢丹時代は、注文と自身の描きたいもののギャップに苦しんでいた時期もあったが、その中で自分を鍛えデッサンと表現力を磨いた。フリーランスになり、その表現力が大きく花開いたのだと思います」と、話してくれた。



オリジナル
(化粧品会社の広告未使用原画)

オリジナル 1985年



『火の鳥 太陽編(上)』
手塚治虫著(角川書店)の
ブックカバー原画 1986年



『火の鳥 未来編』
手塚治虫著(角川書店)の
ブックカバー原画 1986年

フリーランスになったと同時に、妻・雅子さんと2人の子どもは、鳥取の両親の面倒をみるために帰郷。長い別居生活のスタートとなるが、家族の理解と協力のもと、毛利さんは、ますます仕事に邁進していった。

その一方で1975年、鳥取県立博物館で初めて作品展を開き、高校時代の恩師をはじめ、鳥取の人たちと旧交を温めるように。40代以降のイラストには、鳥取大震災前、のどかな幼少期を過ごし、久松山（鳥取市）を駆け上って遊んだ頃の心象風景が投影された作品も多い。

鳥取を拠点に、美術評論家・エッセイスト・小説家として幅広く活動する角秋勝治さんは、地元新聞社の学芸記者だった81年に対談して以



「毛利さんとは、何度か一緒に酒を飲んだようやく打ち解けました」と角秋さん

来、毛利さんの東京の職場を訪ねるなど、交流を深めた1人だ。

3つ年上の角秋さんも学生時代は画家志望で、中学・高校時代から毛利さんは憧れの人。社会人になり上京した際、電車内で伊勢丹の中吊り広告が目飛び込み、イラストレーターとしての活躍ぶりに、胸を躍らせたという。

「初めてお会いした毛利さんは、その圧倒的な描写力の作風から受けるイメージとは違い、大柄な背丈に似合わないシャイな印象の人。照れ隠しの反動で自分のことをぶっきらぼうに話す癖がありました。他人を悪く言うことは一切なかった。成長期の苦労からか、成功しても弱い立場の人への思いやりを忘れず、冷静に自分の立ち位置を承知しているようでした」と語る。対談の中で、「ただ緻密に描き込むだけが能ではなく、無名の職人によって無数の竹で見事に編まれた籠や茶せんのように、絵の世界でも驚異的な手仕事の魅力を発揮したい」と語る毛利さんを、角秋さんは「現代の絵師」と評した。



オリジナル『れんぎょう』2004年

奥深き世界、時代超えて魅了



『哀歌』曾野綾子著(毎日新聞連載)の挿絵
2003-04年

「ここまで描き込むとは…」と、クライアントをうならせる絵にも、毛利さんには必然性があったの事だ。『神の汚れた手』をはじめ、数々の新聞小説の挿絵に毛利さんを指名した作家の曾野綾子さんも、「毛利さんの作品はすさまじい『道楽』であり、道を極めたという意味で『極道』です」(※)と、称賛を惜しまない。

その陰には、フルマソン完走のようなプレッシャーがかかる新聞連載の仕事で、作家の表現世界を理解して伴走者に徹するという姿勢と、納期や約束事を守りながらも、一貫して手仕事にこだわり続けた圧倒的な画力がある。

毛利さんは73歳でこの世を去ったが、その作品は時代を超え、今の若者たちをも魅了している。不遇な時代も乗り越えることで、自身の才能をさらに開花させ、切り開いたその奥深い世界。まだまだもっと、この目で見てみたかった。



『神の汚れた手』曾野綾子著(朝日新聞連載)の挿絵 1978-79年

◎参考文献：『イラストレーター毛利彰の仕事』(2011年2月、鳥取県立博物館発行) 『角秋勝治対談集 創造への旅Ⅱ』(1996年10月、今井書店発行)

※1980年に鳥取大丸で開かれた「毛利彰(挿絵)原画展」の記念レセプションに訪れた曾野綾子さんの挨拶から抜粋して引用。



オリジナル『マイ・マドンナ』1984年

「魅力」を次世代に伝えたい

＊「毛利彰の会」が発足＊

毛利さんのイラストの価値を明らかにし、その魅力を次世代に伝えようとする鳥取市の有志たちが2016年夏、「毛利彰の会」を立ち上げた。現在会員は約50人で、生前の毛利さんと親しい交流があった人や、長年の作品のファンなど、幅広い年代が登録。会合を重ね、埋もれている作品整理や収集に当たっている。代表の毛利葉さんは「定期的に作品展を開き、今後は街の中で気軽に作品に触れられるような工夫もしていきたい」と話している。

ここにこの

Human
Life



コトコト、グツグツ……湯気立つお鍋。
素材の力を引き出した
やさしい味の無添加スープだ。
スープ研究家の東條真千子さんは、
食べる人の健康を願う気持ちを
最高の調味料に、人々の心を温め
「しあわせ」を届け続けている。

東條

スープ研究家

Tojo
Machiko

真千子

文／井田 裕子 写真／田中 良子

※撮影協力＝山陰酸素工業株式会社
鳥取ショールーム

里山の生きものにアンテナを張り巡らせ、
日々奔走する桐原夫妻の日常をエッセーと写真で紹介。

文・写真／桐原 真希

河川敷に群生するヤブカンゾウ



早春の味ヤブカンゾウ

数ある山菜の中でも、食する旬の期間がとても短い植物の1つかもしれない。その名もヤブカンゾウ。日当たりのいい田んぼのあぜや、雑木林の斜面林など人が手入れをしている緑地によく見られる。

中国からやってきたらしく、平安時代にはすでに食された記録も。「心配事を忘れさせるほどの美味しさ」という所以から「ワスレグサ」の呼び名も持つ。アクがほとんどなく、おひたし、天ぷら、ナムルと料理の幅はとても広い。近所の河川敷では、毎年3月の彼岸前後が食べ頃。うっかりは禁物だ。桜前線が南部町にやってくる前に新芽が伸びきり、味わうには葉が固くなってしまう。

目を惹くのは真夏。直径8cmほどの鮮やかなオレンジ色の花が、照りつける太陽に映え、野原を彩る。やや酸味のある甘い香りは、心を柔らかく癒やす。

早春に若芽を美味しくいただきながら、またこの花に出会える季節を楽しみに待ちたい。

ヤブカンゾウの天ぷら。
噛むほどに口に広がる甘
みと独特の風味が特徴



生きもの
センサー
365

—K原さんの里山Diary—



盛夏に似合う華やかなオレンジ色の花



食べ頃の新芽。淡泊なので料理のアレンジがしやすい



Profile

▼きりはら・まき＝東京農業大学農学部卒業。1996年から自然観察指導員として活動。里山関係の体験事業を行う「もりまきフィールドネットワーク」代表。2児の母。
▼きりはら・けいすけ＝東京農業大学農学部卒業。1999年に転職で神奈川県から米子市に転入、2003年に南部町へ移住。現在、米子水鳥公園主任指導員。野鳥をテーマとした環境教育活動や調査研究、湿地保全活動などに従事する。

「日々の食事が大切」 思いと時短から誕生

鳥取市出身の東條さんは、高校卒業後に東京のデザイン学校に進学。卒業後は、都内でイラストレーター・グラフィックデザイナーとして活躍しながら22歳で結婚、翌年には長男を出産し、育児に専念するためにいったん退職した。自宅でも仕事を受けていたが、子育てがひと段落した頃に再就職し、再びデザイナーとして働き始めた。

スープとの出会いは、家庭と仕事の両立に悪戦苦闘する毎日から

専門店が時代に乗り、 ブーム巻き起こす

ある日、知り合いとの何気ない

生まれた。「子どもたちは宝物。

大切に育てるためには、日々の食事が重要」との思いが強かったが、

手間をかける時間は少ない。「だから野菜、肉、魚を全部ドサツと

お鍋に入れて、スープにしました。食品添加物は一切使わない。

「必要ないものをわざわざ食べなくてもいい」との考えからだ。この家族を思う気持ちから誕生したメニューが、後に仕事へとつながっていく。



心と体温める 「しあわせ」

会話で「将来の夢は？」と聞かれ、「いつかスープ屋をしたい」と答えると、「いつかではなく、今すぐ始めたら？」と言われ、目から鱗が落ちた。

早速、仲間と資金を出し合って1999年に東京・銀座にスープ専門店をオープン。当時はほかにスープ専門店がなく、「具たくさんスープ」「食べるスープ」としてマスコミに大々的に取り上げられ、都内を中心に14店舗まで拡大した。

レシピ本も数々出版し、各地でスープ教室を開催。特に「幼い頃の味覚は一生の基礎となる」との思いから食育に尽力、母校の明德小学校（鳥取市）でも教室を開いている。2008年にはスープ研究家として独立、「株式会社マーズスープ」を立ち上げ、無添加鍋スープなどの商品開発を手掛けるようになった。

ずば抜けた行動力は、とどまることを知らず、海を渡らせる。子どもたちが日本の学校生活を送るなかで、「もっとグローバルな教育が必要」と感じていた東條さん。

とうじょう・まちこ

鳥取市出身。東京デザイナー学院卒業。グラフィックデザイナーなどを経て、東京・銀座にスープ専門店を立ち上げる。その後、スープ専門家として独立、無添加鍋スープなどの商品開発を手掛ける。2010年、アメリカ・ロサンゼルスへ移住。18年春から鳥取市を拠点に国内での活動を再開予定。
『おうちでつくる幸せスープ』など著書多数。



出版された数々のレシピ本(写真上)と無添加で厳選素材を使用した『やさしい鍋スープ』シリーズ(写真左)

スープを通じて届けたい

末の娘の中学校入学を機に留学を提案し、学校見学のためにロサンゼルスを訪れた。その際、たまたま東條さんのことを知っていた現地で食品を扱う日系企業から「一緒に働かないか」と誘われる。であれば娘と一緒に、アメリカへ旅立ったのは2010年のこと。

永住権を取得後、フリーランスで商品開発やパッケージデザインを請け負う一方で、13年には米国での会社「du Marche, LLC」を

設立し、多彩な能力を発揮。さらに16年からは、日本の若手アーティストの海外進出を支援する「lat du marche」の活動もスタート。精力的に事業の幅を広げている。

故郷の良さを再認識 原点に戻り国内へ

そして18年春からは、鳥取市を拠点に日本での活動も再開予定

東郷湖産シジミのミネストローネ



- 材料(3~4人分)
- 東郷湖産シジミ…350g
 - タマネギ…1/2個
 - ジャガイモ…1/2個
 - セロリ…1/3本
 - ニンジン…1/2本
 - トマト…1個
 - ニンニク…1片
 - 水…400cc
 - 昆布…10cm
 - オリーブオイル…大さじ1
 - 塩、こしょう…少々

■作り方

※下準備…シジミは水につけて砂出しをしておく。昆布を水につけてだしを取っておく。

- ① ニンニクはみじん切り、他の野菜はすべて1cm角に切る。
- ② 鍋にシジミと昆布だしを昆布ごと入れてフタをし、中火にかける。殻が開いたら火を止め、昆布だけ取り出して煮汁ごと別皿に取っておく。
- ③ 鍋にオリーブオイルとニンニクを入れて弱火で炒め、香りが立ってきたら中火にして、タマネギ、セロリ、ニンジン、ジャガイモの順に入れてよく炒める。
- ④ 野菜がしんなりしてきたらトマトを加えて炒め、②の煮汁を加えて野菜がやわらかくなるまでフタをして煮る。
- ⑤ シジミを入れ、塩、こしょうで味を調える。

砂丘ながいもと鳥取鶏のポターージュ

■材料(3~4人分)

- 砂丘ながいも…210g
- 鳥取鶏のひき肉…220g
- チキンブイヨン…350cc
- ショウガ…10g
- ミツバ…適量
- ごま油…大さじ1
- 薄口しょうゆ…小さじ2
- 塩、こしょう…少々



■作り方

- ① 砂丘ながいもは皮をむき、30g分を1cm角に切り、残りは適当な大きさにスライスする。スライスしたナガイモはチキンブイヨンと一緒にミキサーにかける。(ミキサーがない場合はナガイモをすりおろしてチキンブイヨンでのばす)
- ② 鶏ひき肉に塩、こしょう少々、すりおろしたショウガの1/3を加えて軽く混ぜておく。
- ③ 鍋にごま油を入れて中火にかけ、鶏のひき肉をあまり崩さないように炒める。火が通ったら1cm角に切った長芋を加えてさっと炒める。
- ④ チキンブイヨンと合わせた長芋、すりおろしたショウガの残り半分を加え加熱する。沸騰してとろみがついてきたら薄口しょうゆ、塩、こしょうで味を調える。
- ⑤ 器に盛り、残りのすりおろしたショウガとミツバをトッピング。

東郷湖産のシジミ、鳥取鶏のひき肉などを使って、ササツと2種類のスープを作ってくれた。

「私と子どもたちを育ててくれたスープは、とてもしあわせな食べ物。そのしあわせを、一人でも多くの人に伝えていきたい。」

素材の数だけ広がるスープの世界。飲めば体がじんわり温まる。彼女のレシピが、鳥取の可能性を無限大に広げる予感も。うれしさに胸も温かくなった。



次世代へつなぐ代々の音色

「技術だけでなく、太鼓そのものを次世代につなげる責任があると思っております」。

和太鼓は、意外なほど暮らしの身近にある。神社や寺院にはなくてはならず、演奏グループは全国各地にあり、地域の祭にも必須アイテム。ただし、太鼓は、人間よりずっとずっと長生きなのだ。

太鼓職人 おお え しげ と 大柄 重人

鳥取県内で唯一、太鼓製造を手掛ける「大柄太鼓店」4代目の大柄重人さん(56)は、初代の曾祖父が作った太鼓が修理に持ち込まれた時、驚きと喜びと、何より責任を感じたという。「再び音色が甦るように、耳だけではなく、感覚の全てを研ぎ澄まさなければ。同じくらい長く使ってもらいたいから」と思いを込める。

県内のほか、広島県や岡山県からも修理の依頼が来る。皮の張り替えが多いため、鳥取和牛の皮などを食肉処理センターに「太鼓用に」と依頼。仕入れた皮は下処理をした後、なめして乾燥させ、太鼓にあった厚みに削っていく。

「皮の張り具合に一番神経を遣う。『ドン』という単純な音じゃなく、響き、余韻、すべてが違って来る」ため、納品した時、「あ～、いいなあ」と言われると肩の荷が下りた気がするという。

工場の隅には兵庫県の人から引き取った「元禄10年」と書かれた太鼓が。「修理すれば十分使えますよ」と大柄さん。300年前の音色が甦る日も来るかもしれない。

文／稲嶋 正彦 写真／田中 良子



ケヤキの大木からくり抜かれた太鼓の原型を少しずつ削りながら微調整をして形を整える

MEMO

胴の部分はケヤキ。「樹齢100年以上のものじゃないと使い物にならない」といい、原木を切ってから中をくり抜き、3年以上乾燥させてまず外側を整え、次いで内側に溝を付けるように削っていく。手間と時間のかかる作業の連続だ。制作の一方、大柄さんは太鼓グループ「奥日野源流太鼓」を16年前に立ち上げ、太鼓文化の伝承にも注力している。

● 大柄太鼓店
 所 日野郡日南町三栄1766
 ☎ 0859-82-0362

修理依頼で送られてくる大小さまざまな太鼓。手前は兵庫県の人から寄贈された江戸時代の太鼓



なめした新しい皮をロープで引っ張って型をつける作業。修理の工程は全て手作業で、ひと張り仕上げるまでに約2カ月かかるという

仕入れた皮は毛や汚れを落とし、柔らかくしなやかにするまでなめしていく。厚さを均一にすることが重要





【公演概要】

異なるアプローチで違う表情 鳥取県文化振興財団がプロデュース

鳥取県文化振興財団は、特色ある地域文化の創造と発展に重点をおいたオリジナル舞台作品の上演を目指し、2014年から「プロデュース創作公演」に取り組んでいる。鳥取県在住・出身の文化芸術活動で活躍する人々や団体と一緒に、プロフェッショナルのサポートを受けながら、作品を創り上げていくものだ。

邦楽（古典芸能）、弦楽に引き続き、第3弾となる今回のジャンルは「舞踊」。第一線で活躍する2人のダンサーを招き、2作品を制作。「観る」「踊る」の両面を併せ持ちながらも、異なるアプローチによって違った表情、が楽しめる。県内外で活躍する若手ダンサーや地域住民も参加して、身体表現の美しさ、多様さ、踊ることの楽しさなど、さまざまな角度からダンスの魅力を発信する。

- 日時：3月3日(土)・4日(日)
- 会場：とりぎん文化会館（梨花ホール・小ホール）
- ①「夢の破片」(振付：島地保武)
開場13:30／開演14:00／小ホール
- ②「あげだん 上げてどうする そげだん」(振付：近藤良平)
開場15:00／開演15:20／梨花ホール
- ▽一般：2,500円 高校生以下：1,000円
- ※②のみ一般：1,200円 高校生以下無料(要整理券)
- ※両公演とも全席自由
- ※未就学児＝①は入場不可(託児サービスあり)②は入場可

文／鳥飼明子 写真／山田真実

昔から人は、舞踊や音楽、芸能に親しんできた。神に捧げるもの、悲しみを癒やすもの、人と人の交流を促すもの。その種類や目的は多様だが、「心に響く」という作用は同じ。決して生活の必需ではない。それでも芸術文化は、日々を生きる私たちの心に潤いをもたらす恵みの雨となる。さあ、アプローチの異なる2つの舞踊で、あなたは何を感じるだろうか。

とらえ、感じ、動く。

「観る」「踊る」2つの舞踊公演

3月3・4日 鳥取市で開催



1人が足を一步踏み出すと、呼応するかのうちに次の人が踊りだす。その踊りが次の踊りを生み、やがて舞台上の全員が変化し始める。時には軽快に跳ねるように、時には重く疲れて地を這うように――。

舞踊公演「夢の破片」は、倉吉市出身の自由律俳人・河本緑石が書いた『詩集夢の破片』をモチーフに、鳥取県の風土やその土地に暮らす人々から受けたインスピレーションを加えながら創作したダンス・パフォーマンスだ。出演は、地元出身者を中心とする5人の若手ダンサー。この公演の演出・振付を手がける島地保武さんも出演する。



島地さんのアドバイスを受けながら、少しずつ動きをつくりあげていくダンサーたち

大きく伸びやか、驚くほど柔軟で、ムチのようにしなる体。空気を切り裂くように素早く動いたかと思えば、フワッと空間を抱くように踊る。誰もが一瞬で心を奪われる、それが辻本知彦さんのダンスだ。

「プロフェッショナルな島地さん、彼についていこうと必死にもがく若手ダンサーたちの間にいて、その両方のエナジーを味わえる」と、出演を喜んでいる。



若手を鼓舞
頼れる兄貴
として牽引

▽▼辻本知彦さん

企画から公演までは、半年にもなる長期間の拘束となるが、多忙な合間を縫って稽古にもほぼ全参加。その踊りで若手を鼓舞し、時に熱く語り合い、頼れる兄貴、として彼らを引っ張ってきた。

辻本さんが今回参加した理由は、「島地さんに誘われて」。ライバルかつ親友である2人に、緑石と賢治の関係を重なる。それをイメージしながら、公演ではデュオを踊る予定だ。

緑石が詩に込めた思いを理解するのは難しいが、自分なりの解釈で心の闇を感じながら踊る。「もし緑石が生きていてこの公演を観たら、『自分の詩がこんなふうになるんだ!ヤバイな』と言わせたいですね」と、いたずらっぽく笑った。

【つじもと・ともひこ】ダンサー、振付師。2007年「シルク・ドゥ・クレイユ」に日本人男性ダンサーとして初めて起用され、11～14年のツアーで27カ国・485公演を成功させる。また、米津玄師「LOSER」、sia「Alive」日本版MV、土屋太鳳など、多数の有名アーティストの振り付けも手掛ける。

鳥取公演が決まったとき、島地さんが知人にそのことを告げると、「それならぜひ緑石を調べてみて」と勧められたそう。そしてゆかりの地を巡り、リサーチする中で、『詩集夢の破片』に出会った。

河本緑石は、童話『銀河鉄道の夜』の作者・宮沢賢治の親友であり、一説には物語に登場する主人公の友人・カムパネルラは、彼がモデルではないかといわれている。俳句だけでなく絵画や音楽も嗜む文化人で、賢治から贈られた童話集『注文の多

い料理店』や詩集『春と修羅』に刺激を受け、自らもこの詩集を出版したのだという。

21編の詩には、明治後期～昭和初期の時代を背景に、緑石の苦悩、芸術文化への欲求などが綴られているが、その複雑かつ独特の表現は、すぐには理解しがたい。しかし「何が言いたいのか?と、わかりにくいからこそ、いろんなアプローチができると思ったんです」と島地さん。緑石の精神世界を表現することに挑戦している。

「わかりにくい」からこそ挑戦

【しまじ・やすたけ】ダンサー、振付家。2004～06年日本初の劇場専属舞踊団「Noism」所属。06～15年ドイツ・フランクフルトのザ・フォーサイズ・カンパニーにて、中心メンバーとしてメインパートを踊る。近年は日本を拠点にダンサーとして公演に出演するほか、美術館や公立劇場などで舞踊作品、インスタレーションなど幅広く新作を発表している。



「ダンサーたちそれぞれの持ち味を生かし、ここでしか観られない作品を披露したい」と意気込む島地さん

また、世界的なサーカス・エンターテインメント集団「シルク・ドゥ・ソレイユ」に、日本人男性ダンサーとして初めて参加した経歴を持つ辻本知彦さんも特別出演、さらには日本を代表するバレエダンサー・酒井はなさんが演出・振付助手に付くという豪華さ。めったに見ることのできない極上の舞台が注目を浴びている。

出演ダンサーはオーディションで選んだ。選考基準は、踊りがうまいかどうかではなく「どんなふうに変化しそうか」という。バレエ、ジャズ、ストリートなど、さまざまなダンス経験を持った個性豊かなメンバーが決まり、昨年8月から作品の創作をスタートした。

基礎技術、
表現力などを
サポート

▽▼酒井はなさん



「夢の破片」の演出・振付助手を担うのは、島地さんとダンスユニット「アルトノイ」を組む酒井はなさんだ。演出・振付・出演の3役をこなす島地さんをサポートする。

「私の仕事は、彼のインスパイアを大切にしながら、演出や作品の流れを客観的に見る、こと」と酒井さん。人生のパートナーでもあり、島地さんの創作の流れや考え方をよく理解しているだけに、あえて違う目で見ることによって作品のクオリティを上げていく。

若手ダンサーたちに対しても、丁寧なアドバイスを心がける。「あたかも今創りだしたかのように踊ってほしい、というのが彼のやり方。それを実現するには、踊り手としての基礎的な技術はもちろん、創造力、表現力など、実はかなりの下ごしらえが必要なんです。鍛えなくてはいけないことがたくさんあるので、そこの部分のお手伝いができた」。ダンサーを一段上のレベルへ引き上げ、作品のみならず、彼ら自身の個性もキラキラ輝けるようにと力を尽している。

【さかい・はな】バレエダンサー。クラシックバレエを中心に活動しつつ、コンテンポラリーやミュージカルにも積極的に挑戦。進歩し続ける技術と表現力、品格ある舞台で観客を魅了する。新国立劇場バレエ団名誉ダンサー。2017年に紫綬褒章受章。



◆ あげだがん 上げてどうする そげだがん ◆

もう一つの公演は180度毛色が違う。愉快的ダンス・パフォーマンスを創り上げる振付家・近藤良平さんの演出・振付・出演で、リズムカルな鳥取県西部の方言を使ったタイトルからも、既にユニークさを感じられる。

公募で集まった約30人の地域住民が出演。「夢の破片」と違うのは、ダンスが未経験でもOKということだ。経歴はさまざま、年齢層も幅広く、高校生～60代までが集ったチームは、その名も「トリドルズ」。

コンセプトは「楽しく踊る」こと。「基準は、踊れる・踊れない、ではなく、みんなと一緒に踊るか・踊らないか。ああだこうだ言いながら、踊って楽しんだもん勝ち」と近藤さん。ゆえに昨年10月から始まったレッスンでは毎回、笑顔が満開。あるときはハチャメチャに、またあるときは美しく伸びやかに、誰もが躍動感に満ちている。また、オノマトベ(※2)や

とにかく楽しんだもん勝ち！



「トリドルズは動物園のようになにげわいがあり、おもしろいですね」と近藤さん
(写真提供：コンドルズ © HARU)

【こんどう・りょうへい】ダンサー、振付家。男性のみの学ラン姿でダンス・演奏・人形劇・映像・コトを展開する、人気・実力ともに日本を代表するダンスカンパニー「コンドルズ」主宰。NHK連続テレビ小説『てっぱん』のオープニング、映画『ヤッターマン』など、多数の振付を担当。第67回文化庁芸術選奨文部科学大臣賞受賞。2004年に鳥取大学の非常勤講師を務めるなど、鳥取県との関わりも深い。



満面の笑みで楽しく練習に励む参加者たち

躍動感に満ちた 自由な表現

鳥取の方言を動きで表現するなど、観る側を飽きさせない近藤さん独特の構成だ。

メンバーの一人、長谷川茜さんは「テクニクじゃなく、表現力を求められるのがいい」と実に楽しそう。今回がダンス初経験という松浦秀一郎さんも「言葉を使わず体の表現だけで人と対話するのは難しいけど、そこが面白い」と、すっかりダンスの魅力に目覚めたようだ。

近藤さんは、「みんな愉快で、個性に味がある。新たな表現者、であることは間違いない」と、トリドルズを讃える。「ここでしかできない『ことばあそび』『からだあそび』を表現し、観客にも開かれたダンスを目指します。きっと生きるヒントをたくさん盛り込んだ舞台になるでしょう」。

出演者だけでなく観客の体も自然と動きだし、「また観たい」「私もダンスがしたくなった」と言ってもらえたら公演は大成功だ。

※2 オノマトベ＝トントン、ブーブーといった擬音語・擬態語。



「実はメンバーはまだ数回しか会ったことがないんです」と長谷川さん(左)と松浦さん

「バレエでは決まった役柄・型を踊る。でも、コンテはその場の空気ですの、鈴木春奈さん。少し戸惑いながらも、「受け身ではなく、積極的に動く意識が必要」と、今までの殻を破ろうと必死だ。また大田信之介さんは、「すべてが初めての経験。

基本をがっちり決めず、現場でダンサーたちの個性を引き出しながら、少しずつ創り上げるスタイルだ。コンテンポラリーダンス(※1)(以下・コンテ)の基礎を磨きながら、創作を進めていく。ダンサーたちの多くが、自分の得意ジャンルではないだけに、苦労はつきもの。だが、そろって口にするのは「新しい世界、新しい自分との出会い」という魅力だ。

個性引き出し創り上げる



それぞれの個性が響き合い、ひとつの「かたち」となる

濃い時間を過ごしています。不安もあるけど、ワクワクもする。伸び伸びと自由にやってみたい」と意気込みを語った。

島地さんは彼らに、「出来上がった振りをもらって、それをただ踊るというのではなく、いろんなものから選びながら、そして悩みながら、今まさに詩を書いているように踊ってもらいたい。緑石が詩をつくると

きも、恐らくそうだったのではないかと、クオリティの高いパフォーマンスを期待する。

県文化振興財団の担当・野田景子さんも、「この公演は、多くの人に創造性の高い舞踊作品を観てもらいたいだけでなく、県内でパフォーマンスや指導者として活躍している若い世代が参加することで、新しい経験や出会いを得て、レベルアップする

舞台は中央に設定、その周りを取り囲むように観客席を設ける。「お客さまが360度にいるから、ダンサーは隙がないよう後ろにも意識を持たないといけない。大変な状況です(笑)」と、島地さん。コンテの舞台では珍しく、台詞を言ったり、緑石の詩を朗読したり、ミュージカル調に歌ったりするシーンもあるというから面白い。

7人の個性がぶつかり合い、呼応し合って繰り広げられる生き物のような舞台。楽しむコツは、頭で考えるのではなく、感覚で観る。こと。彼らが訴えてくることを、そのままの心で感じとってほしい。

※1 コンテンポラリーダンス＝バレエ、フラメンコ、ジャズダンスなど既成のジャンルに属さず、さまざまなジャンルの影響を受けた現代的な舞踊。



鈴木春奈さん(経歴：クラシックバレエ)



大田信之介さん
(経歴：クラシックバレエタップ・演劇)



赤井彩香さん
(経歴：クラシックバレエコンテンポラリー)



御船亜美さん
(経歴：ジャズ・ジャズコンテンポラリー)



村上渉さん
(経歴：コンテンポラリー・ストリート)

【問】
公益財団法人
ふるさと鳥取県定住機構
所 鳥取市扇町7
鳥取フコク生命駅前ビル1階
☎ 0857-24-4740
WEB <http://furusato.tori-info.co.jp/>

▼IJUターン就職に関する相談
☎ 0120-307-238
(8時30分～17時15分※土日・祝日除く)
▼移住に関する相談
○鳥取県移住定住サポートセンター
☎ 0120-841-558
(8時30分～17時15分※土日・祝日除く)
○とっとり移住定住ポータルサイト
WEB <http://furusato.tori-info.co.jp/iju>

のびのびと創作活動 憧れの暮らし方を実現

工房の外観(写真左)と
広々とした内観(写真
下)。漆喰壁は自身で塗
ったという



「試行錯誤しながら暮らしてきました」と浜知さん

【PROFILE】
◎家族構成／1人暮らし
◎移住前の住まい／大阪府四條畷市
◎移住時期／2011年10月
◎現在の仕事／銀アクセサリー作家、
創作工房tree frog運営



体験教室で作れるブローチと
刻印入りプレートのバングル



カフェコーナーでは本格的な
手作りパンも提供

■ tree frog ■
所 西伯郡伯耆町久古1341-7
☎ 0859-68-5658
FB <https://www.facebook.com/yukakohamachi/>

「好き」を集めた心地よさ
アクセサリーは美しさだけでなく、長く身に着けるための丈夫さも必要だ。純銀のままだと強度が得られないことから浜知さんは、精錬された純銀の粒に銅5.0～7.5%を加えた合金で銀板や線への加工、鋳物なども行い、付き物の金具の素材やデザインにもこだわる。
銀細工は手先に全神経を集中させて行かなければ根気のいる仕事だが、「金属を溶かすところから始まり、鍛錬したり溶接したり。ゼロから思い通りに形作る古典的な作業が好きなんです」と、ほほ笑みながらサラリと話す。
工房は、作品の展示販売を行う

ギャラリーとカフェスペースを併設し、奥の工房も見渡せる広々とした空間だ。木造りと漆喰壁の温かさが心地よい。開設時から要望に応じて、指輪・誕生祝いのスプーン・刻印入りプレートのバングルなどを作る「体験教室」を開いており、今年はさらに彫金教室も計画中だ。浜知さん手作りの天然酵母パンと珈琲でもてなすカフェコーナー（曜日限定）も訪れる人に好評。カフェではコツコツ買い集めたお気に入り作家の器を使っている。
「ひと目ぼれした銀細工。その魅力がこの場所から1人でも多くの人に伝えていきたい」。大山の麓に工房を構え、試行錯誤しながら間もなく7年目。ますます地に足を付け、そして丁寧に創作と暮らしをつむいでいく。



細かい作業をコツコツとこなす浜知さん

◎銀アクセサリー作家(伯耆町)◎
ほうきちよう

浜知 有加子さん

しじょうなわて
大阪府四條畷市出身

移住前は、大阪を拠点に創作活動を行っていた浜知さん。銀との出会いは、20歳の頃に訪れた京都の観光地。ふと足を止めた路上の手作りアクセサリー店の銀細工に惹かれ、その後2年間、彫金を学ぶ。結婚後も子育てをしながら、作品を発表し続けていた。
2004年、長男の島根大学（島根県松江市）入学をきっかけに、自然豊かな山陰の魅力にはまっていった。「もともと海か山の近くで暮らすのが夢でした。体調を崩した時期もあり、以降、よい好きな場所に住みたい思いが強くなって」と、振り返る。
鳥取・島根で自身の作品を展示販売するカフェなどと交流を重ねながら、

山陰に惹かれ移住を決意



個性豊かなアクセサリー

ら、少しずつ移住拠点を探していた矢先、現在地との出会いが訪れた。目の前に雄大な大山を眺めるこの場所は、同じ関西からイターンして、ものづくりをする作家の旧工房。使わなくなった土地・建物を譲り受けてリフォームし、12年5月、銀の創作工房「tree frog」が産声をあげた。



誕生祝いに人気のスプーン



銀細工をつくる最初の工程。
銀の粒をガスバーナーで
ゆっくり溶かす



文／島 香子
写真／蒼野 雄一

幾何学的なキューブ型のイヤリングをはじめ、銀や天然石を使ったアクセサリーや銅、真鍮のクラフト・オブジェ制作で、多くのファンを持つ作家の浜知有加子さん。それらの作品は、「好きなものに囲まれる暮らし」とともに、自然に抱かれた工房で生まれている。

鳥取の
うま味

奥深い
ホンモノの世界へ

「和牛フィレ グラスドヴィアンド(ポルト酒とフォンドヴォーのソース)」(手前)はカボチャ、黒人参などの野菜とボムビューレ(マッシュポテト)と一緒に。中央の皿は「アナゴのテリーヌ(赤ワインと根セロリのソース添え)」(左)と「季節の焼野菜」(右)オランダーズソースと刻んだ黒トリュフ。奥は「寒ブリのボアレ」。カブのソースを敷き、ポッターガ(イタリアのカラスミ)を刻んでかけたもの。
※写真はコース各種から。
※内容は毎月変更あり(代金は税込)
▼4800円コース
▼5800円コース
(予約なしでも可能だができれば事前連絡を)
▼6800円以上のコース
(前日までに要予約)
※アレルギー対応可。特別な食料希望の場合、日程に余裕必要。



Bistro Du Cœur
●ビストロ ドゥ・クール●
【所】倉吉市上井町2-12-10
【☎】0858-26-0506
【営】18時～23時(21時LO)
【休】月曜日、月始めに不定休
【Web】https://www.facebook.com/bistrodocoeur/



■無添加の本格派フレンチ■

加減で調理。肉のうまみと歯ごたえがたまらない。

「前菜からデザートまでがひとつのストーリー」のコンセプトに沿い、メニューはコースのみ。酒類にもこだわり、ワイン30種、日本酒20種に果実酒など多様に取りそろえ、料理にぴったりの1本を提案してくれる。

エゾシカやグラスフェッドビーフ(※)など希少食材の希望にも極力対応するという。「どんなわがままも、相談してみても」と柴山さん。

和モダンで設えられた空間での「ホンモノ」の料理とサービス。しばし日常を忘れ、異世界へと誘ってくれる。

文／松村 亜紀子 写真／佐野 明美

※グラスフェッドビーフ＝放し飼いで牧草だけを食べて育った牛。赤身中心で柔らかく、高栄養・低脂肪で、肉本来のうまみが味わえる。

文の迷宮をゆく

つれづれ書林女子



著者の祖父で、元大工棟梁の神前弘さんが、80歳くらいから95歳で亡くなるまで、身辺の紙切れを切り貼りして毎日作り続けた「封筒」の作品集。ティッシュ箱を薄く剥がしたものの、デパートの包装紙、古い暦、レシート、新聞に広告：いびつな、でも元棟梁らしく実直に仕上げられた「封

「かみさま」の無垢な仕事

『おじいちゃんの封筒：紙の仕事』(藤井咲子著・ラトルズ発行)

「筒」の材料になったそれらは、意味を持たされた存在だったときの面影を残しながらも、安らかな貌をして、ただの「紙」という本来の姿に回帰している。

書店で本書を見つけたとき、私はこの粗末とも言える封筒らが、あまりに無垢で、どんな美術作品より美しいことにショックを受け、ショックのあまり、それから数年ほども逡巡してレジに差し出すことができなかった。忘我の境の中に生まれたそれらは、まるで神様の仕業のようで、俗世の金銭と引き換えるにはあまりに崇高に思えた。



文・イラスト／前田 環奈

まえた・かな
鳥取市出身。邯鄲堂店主。「自分が通いたい古本屋」を鳥取に作るために2012年10月に古本屋「邯鄲堂」を開店。古本の販売のほか、陶磁器の修理(金継ぎ)も行っている。



かんたん どう
【邯鄲堂】所 鳥取市吉方町2丁目311
☎ 080-2940-2127

voice

■116号の感想から■

「あーとの森」の寺口敬子さんの作品「秋だより」に惹かれました。すごく素敵なデザインで、他の作品もぜひ見てみたいになりました。
(岡山県岡山市 藤原久美子)

巻頭特集の「海を守り、闘う勇者たち」が良かったです！北朝鮮の不審な木造船などのニュースを見て、日本の守りは大丈夫なのか…と不安になり、恐怖も感じました。でも日々国民のために活躍されている海上保安官や機動救難士の方々の活動を知って頼もしく思いました。また女性の活躍が嬉しく、応援したくなりました。このほか「目指せ！イケてる農業」も面白かったです。後継者に悩む農業界の新しい風となってくれそうで期待も高まりますね。
(鳥取県鳥取市 森本一美)

海を守る保安官として、活躍されている若者の記事を読み、感無量になりました。たくましい姿ですね。今の時代、本当に貴重な存在だと思います。
(京都府左京区 服部眞智子)

趣味で茶約を作っているの、「きらり匠人」にあった竹芸芸の記事は、大変興味深かったです。
(兵庫県神戸市 村瀬千賀子)

NOWの表紙のデザインも素敵です！、全体の内容も充実していますね。海上保安庁の仕事は、多岐にわたることは知っていたものの、機動救難士は初めて知りました。それぞれの役割が重要でとにかく「感謝」の一言です。
(三重県志摩市 中北京子)

「生きものセンサー365」を読みました。冬の晴れた日、我が家の庭にある桜の木の小枝に時々、スズメや色鮮やかな小鳥が来ます。本当に野鳥観察は冬がオススメです。
(鳥取県鳥取市 多久田英治)

「マコにこの人」の金本さんの宇宙に対するインタビューは興味深く、科学力の進歩には驚かされました。遠い存在だと思っていた宇宙ですが、少しずつ身近に感じられる話を聞くと嬉しくなりますね。
(鳥取県倉吉市 池本里美)

今回NOWを初めて手にしました。観光だけでなく、そこに暮らす人々の素の姿が生きて描かれており、とても興味深く読ませていただきました。色使いや写真もとても綺麗で感激しました。センスが良いですね。
(長野県長野市 石坂昇)

読者プレゼント

応募バッチ
2018.
3/31
消印有効

■ 応募方法
頁右上のクイズの答え、ご意見、ご感想とともに希望の商品名と記号、住所、氏名、年齢、電話番号を明記し、下記までお送りください。ハガキまたはメールで受け付けています。なお、感想が次号の「VOICE」に掲載される場合、住所、氏名が明記されることをご了承ください。当選の発表は、商品の発送をもって代えさせていただきます。

■ プレゼント応募にはクイズへの回答が必須です。本誌を読み、頁右上のクイズにお答えください。

■ 応募先
〒680-8570 鳥取市東町1丁目220
鳥取県広報連絡協議会(鳥取県庁内)
「とっとりNOW読者プレゼント」係
メールアドレス: now@kouhouren.jp

※お預かりした個人情報は、プレゼント発送以外の目的に使用することはありません。

● 117号プレゼント応募用クイズ ●

Q

舞踊公演「夢の破片」のモチーフとなった同名の詩集を作った倉吉市出身の自由律俳人の名前は？空欄の3文字に漢字でご記入ください。

116号のクイズの答えは「機動救難士」
「巻頭特集」の記事中に正解あり。

A



のきょう
良熟梅酒 野花 (500ml) 【3名】

湯梨浜町特産の完熟した「野花梅」を日本酒に2年以上漬込んだ梅酒。舌触りはとろりとして、濃厚でコクのある豊かな味わいが堪能できる。

問 梅津酒造株式会社
☎ 0858-37-2008

B



鹿肉缶詰 (170g)・
鹿肉風味ポテト (140g) セット 【5名】

八頭郡産の鹿肉を甘辛く煮詰めた「鹿肉大和煮」と、鹿肉のステーキ風味のフライドポテト「シッカリポテト」のセット。ジビエ食品を手軽に楽しめる。

問 いなばのジビエ推進協議会
☎ 080-2948-3404 (米村)

C



【3名】

「ナオミフルーツ」セット (10g×5袋)

ナシやカキ、キウイなど県産果物を使用したドライフルーツ。甘味・添加物は一切使わず、素材そのものの味が楽しめる。製菓づくりの材料にも。

問 くだもの工房高田
☎ 0858-28-1534

D



【3名】

ちゅるんと濃厚な梨ゼリー (175g×4個)

二十世紀梨の果汁を贅沢に使用したパウチ入りゼリー。つるんとしたのど越しと爽やかな酸味が後味すっきり。凍らせてシャーベットにしても美味。

問 株式会社テラファーマ
☎ 0857-39-9085

E



乾燥 美々きくらげ (20g) 【3名】

完全無農薬の菌床栽培で育てた県産キクラゲを使用。カルシウムや鉄分などの成分が豊富。肉厚で歯ごたえがあり、和洋中さまざまな料理に合う。

問 ISN株式会社
☎ 0857-72-8422

F



みささ
三朝ジェル (50g) 【3名】

世界屈指のラジウム温泉「三朝温泉」の温泉水が入ったオールインワンタイプの美容ジェル。ミネラルやコラーゲンたっぷり肌にハリと潤いを与える。

問 三朝温泉旅館協同組合
☎ 0858-43-0431

G



【3名】

星取県トートバッグ (幅36cm×高さ37cm)

イラストレーター・毛利みき(巻頭特集15頁)さんデザインのとートバッグ。鳥取県の星空の美しさをPRする「星取県」をイメージ。

問 コスメティックパティオ ブルーム
☎ 0857-85-0500

H



砂丘ごぼう肉みそ (100g) 【3名】

北栄町産の砂丘ごぼうの香りと食感を楽しめる甘口の肉みそ。4種類の無添加みそを配合。生野菜のディップや中華などの料理の隠し味にも効果的。

問 鳥取県青果青果有限会社
☎ 0857-26-2321

Editor's note

□ ■ 編集後記 ■ □

ひと目見たとたん、ずきゅーん。ハートを射貫かれた。脳裏に焼き付いて離れない。その作品を是が非でも誌面に載せたく企画した巻頭特集。取材で毛利さんのご家族に会って感動したのは、妻の雅子さんの生き方だ。どん底の時代を支えた

後、彰さんとは25年間の別居生活へ。双方の両親を含め、家族の世話を一手に引き受けた。「仕事に集中させてあげたかったからね」(雅子さん)。別居なんて、時代的にも偏見が厳しかったはず。それさえもどこ吹く風と、さらりと受け流してきたのであろうことが、会話から想像がついた。▼まさに妻のかみがみ……。カッコイイ、感服、降参だ。穏やか

な笑顔の裏に秘める真の強さが、家族みんなを幸せにしたのだ。▼性別にかかわらず、大物には常に陰で支える人物あり。時代が変わっても、この図式は割と定型だ。昨今に増殖する「自分自分主張」。過熱しすぎると、隣にいる大切な人の可能性をつぶしてしまうかも!? ※注 あくまでも才能には個人差があります。悪しからず。(苦笑) 【Hi】

とっとり
鳥取県広報連絡協議会 vol.117
Now
2018 Spring

《企画・編集・発行》鳥取県広報連絡協議会
〒680-8570 鳥取市東町1丁目220(鳥取県庁内)
《制作》株式会社ジェイ・エス・エス
〒680-1131 鳥取市馬場233-1 TEL.0857-37-4120

☎ 0857-26-7086
☎ 0857-29-6621

とっとりNOW 検索
http://www.kouhouren.jp/
2018年3月1日発行 定価309円